

子どもの主体性を育てる

～コルチャックに学ぶ子どもの権利～

鳥取こども学園希望館 館長 西井 啓二

1 子どもに生活を取り戻す

参考 子どもに生活を取り戻す(1999年「施設処遇の見直しとは…」皆成学園)

- ①子どもと職員の上下関係に成立する支配的な要素を断たなければならなくなる。職員の指導に基づいて生活が営まれるのではなく、自らの考えや自らの行動によって営まれることで子ども自身の生活が成り立つのである。
- ②指導を否定することで、何が取って代わるのかと考えた場合「支援」という表現が適切と考えられる。
- ③施設福祉の分野では、福祉の恩恵を与えるために施設に「収容する」という時代から、保護者や後見人が意志をもって入所させる」という時代が訪れている。
- ④現在は、施設を「利用する」という方向へ変化している。言葉を代えれば「指導する」から「指導を受ける」、そして「指導も受ける」ということになろうかと思われる。
- ⑤「指導も受ける」というのは指導が二義的なことであって、第一ではないという意味を持たせているが、第一義が何かということこそが「生活」と考えなければならない。
- ⑥児童福祉施設が子どもにとって生活の場所となった時に初めて職員は子どもとの共同生活者となる。
- ⑦そのことにこそ施設養護の意味や価値を子どもと職員が見出すことが可能となる
- ⑧子ども達との出会いが我々の仕事であるなら、その出会いにこそ意味を見出そうではないか
- ⑨しかし、それは子ども達との協働の作業であることを忘れてはならない
- ⑩子どもの協力を引き出し、職員と力を併せて、それぞれの子どもの未来を創り上げていくことこそが我々の標的である

2

3 子どもが大人を発見するとき

鳥取大学地域学部 教授 田丸敏高 「子どもの発達と社会認識」1993年法政出版

第1章 社会認識の研究の展望

第1節 子どもが大人を発見するとき

—対話法の復権—

われわれは、ふだん大人の視点から子どもを見ている。自分たち大人を基準にして、子どもの能力や心理を評価している。そのとき、多くの場合、大人と比べて子どもにはどんな「不足」があるのかという見方、つまり、「大人-α=子ども」という図式を利用している。

しかし、実際子どもは大人より豊かなときもある。子どもに接していると、こうした子どもの豊かさは、例えば文学の中で示されている。すぐれた文学は、子どもの世界を発見させてくれるだけでなく、大人が自分自身の中に眠っている「昔の自分」を呼び覚まして、感動を与えてくれる。

ところで、大人が子どもを発見するために文学といった「方法」を必要としたように、子どもが大人を発見するためにも何か「方法」を必要としないであろうか。私はそれをコミュニケーションだと思う。そうしたコミュニケーションを可能にする活動の1つが労働であり、もう1つが対話であると考え。大人と一緒に働くことによって、子どもは大人の世界を端的に知ることができる。この2つのコミュニケーションを通じて、子どもは大人の世界(社会)を認識し始める。

4 「生活の価値」

- ・誰でも生活の価値持っている。小学校の2年生はてんとう虫が価値だった。だけど、5年生ぐらいになると、アヒルや兎が価値になる場合がある。でも、生き物ばかりじゃない。マフラーを編むこととか、織物を織ることとか、そういうことが価値になる。
- ・中学生になったら、男の子から来るラブレターを待ってることが生活の価値になるかもしれない。大学生になると350ccのバイクを買うのが生活の価値になるかもしれない。
- ・どんどん変わっていくんだ。そりゃ変わっていかなくちゃ。お医者さんとか、農業の学者とか出るはずがない。変わって俺はお医者さん、こういう生活の価値を認めただよ。それで俺はお医者さんになりたいんだ。俺はこれで畜産の人工授精する人になりたいんだって、だんだんこう広がっていくわけだ。
- ・でも初めはてんとう虫なんだ。自分の生活の価値が何なのかを発見させなくちゃいけないんだけど、それは与えるもんじゃなくて発見させるもので、初めはダンゴムシみたいなくだらないもの、そういうものの価値を皆が認めてやらなければ高尚な価値に到達しないってことだけは覚えておいて。

(フレネ教育研究会 若狭蔵之助 1997年講演録)

5 「社会自立の定義」

- ・知的障がい児の社会自立とは、児童がその能力や適性に応じ「社会化された主体」として、より肯定的な選択が可能な生活をし、そのような状態が続くことをいう。

(鳥取県立皆成学園「施設処遇の見直しとは？」

～地位的障がい児社会自立推進事業モデル施設業務報告～1999年3月)

6 「順位のない競争」

児童相談所や施設で働いて30数年が経ってしまいました。たくさん子ども達や家族の方々と出会って別れるなかで、若い頃は所長や施設長を見て「私だったらこうしたい。」「私が所長になったらこうするんだ」という夢を抱いていたように思います。

後になって知ったことですがこれを「順位のない競争」というのだそうです。誰かを見て「自分ならこうしたい」とか、「自分もあんな風にやってみたい」と思うことは、子どもが大人へと成長する大切な要素なのです。

里親の皆さまは、子ども達にとって親代わりではありますが、「順位のない競争の相手」でもあります。私自身にとっても、皆さんと出会う度に里親の皆さんが競争相手となっていることも間違いありません。

私は、というと福祉相談センター所員の競争相手になる努力を続けてはいますが、まだまだ修行が不足しているようです。これからも、皆さまと一緒に子ども達の良き競争相手になりたいものです。

西井啓二(2011年鳥取県里親会「里親便り」掲載)